

練馬郷土史研究会会報

第394号

武蔵関公園と

その周辺の史跡巡り(二)

葛城明彦

⑤ 天祖若宮八幡宮

天祖神社と若宮八幡宮が一九七四(昭和四九)年に合祀され成立した神社。天祖神社は、元々本立寺を別当とする関村の鎮守「三十番神社」として祀られ、明治維新後「天祖神社」と改称、一八七四(明治七)年に村社に列格、一九〇八(明治四二)年に溜淵の厳島神社を合祀、一九三二(大正二)年に竹下の厳島神社を溜淵厳島神社に合祀している。一方の若宮八幡宮は奈良時代(あるいは中世・豊島氏の時代)に「武蔵関塞守護神」(武蔵の関所を守る若の守り神)として祀られ、関の廃止後に長い年月を経て、慶長年間(一五九六〜一六一五)に天祖神社の境内に祀られたと

される。天祖神社は大日靈女貴尊(天照皇大神)、他に狭依姫命、倉稲魂命を合祀、若宮八幡宮は菅田別尊、仁徳天皇を奉斎している。例大祭は九月二八日、一八四三(天保十四)年に造営された現社殿は、明治期に一部改修され、さらに一九七三(昭和四八)年に当時の遺構を残して改築された。参道には2基の石造明神鳥居(一八八五年(明治一八年)・一九七八年(昭和五三年))があり、拝殿前には一八五七(安政四)年の石燈籠をはじめ手水舎、狛犬記念碑が建つ。八千平方メートル余の境内は神楽殿、社務所などが整備され四季の緑に覆われている。

⑥ 富士見池(武蔵関公園内ポット池)

江戸期には「関の溜井(溜水を集めて造った溜池・灌漑用水)」と呼ばれていた人工池(湧き水による湿地・沼を人工的に整備したもの)。元々湧水の豊富な地域で、池は現在も石神井川の水源の一つとなっている。名称の史料上初出は「中野筋鷹場境村方境杭覧」(享保期一七六六〜一七三六の制作)にある「関の溜」。その名は富士山とは関係なく、「東」伏見にある池」ということから「ふしみいけ」と命名され、それが変化したと考えられる(実際には池の付近から富士は望めず、また昭和二十年代の史料では「伏見ヶ池」「伏見池」との名称・表記も存在)。なお、石神井川は上流部で「枯れ川」となっている時期も多く、現在通年で

流れが見られるのはこの富士見池脇以東である。

☆ 武蔵関公園

大正期に、ポット場・遊具を備えた私設公園「若宮遊園」として開園した公園。一九三八(昭和二三)年に西武鉄道株式会社と武蔵関公園建設協賛会が約一万四千坪を公園地として寄付し、以降は東京市立武蔵関公園となった。一九七五(昭和五十)年には練馬区に移管され、現在は練馬区立公園となっている。面積は、45,985㎡(中心部の富士見池は約21,000㎡)。

⑦ 幻の城址その①

富士見池南東側段丘上の溜淵遺跡からは、中世の城郭遺構と思われる敵堀や障子堀が発見されている。形状から、後北条氏時代のものである可能性が高いが、築城時期・城主等は一切不明である。現在は該当の場所に関町北三丁目第二アパートの給水塔が建てられている。

⑧ 溜淵遺跡・武蔵関遺跡

旧石器・縄文時代早期〜中期を中心とした遺跡。前述(⑦)の通り、遺跡内からは中世の城郭遺構と思われるものも検出された。また、近辺の武蔵関遺跡から発見された大型槍先形石器は区の登録文化財にもなっている。なお、遺跡名の表記で「ためぶち」は「溜淵」であるが、付近の橋の名の表記は「溜淵」となっている。

⑨ 早稲田大学付属施設

西武新宿線東伏見駅前には早稲田大学東伏見キャンパスがあり、周辺には安部磯雄記念野球場・馬場・ホッケー場・射撃場・サッカー球技場・アメリカンフットボールグラウンド・庭球部・山岳部・学生寮など多くの施設が併設されている。なお、このうちのアメリカンフットボールグラウンドからは後述(⑫)の下柳沢遺跡が発見されている。

高札場

〇五月例会 五月三十日(木)
新緑の秩父札所巡り(4)

午前十時好天の西武秩父駅前からマイクロバスで二十七番大淵寺へ。「月影堂」と呼ばれる。本尊聖観世音は弘法大師作と伝わる。

二十八番橋立堂の本尊は札所唯一の馬頭観音で珍しい。観音堂の横の岩山に鍾乳洞があり数人が中へ入った。二百米もの長さだという。ほかの人はそばの茶屋で一休み。二十九番長泉院は二十五番久昌寺と同じ「石札堂」。二十九番法雲寺の本尊如意輪観音は楊貴妃をモデルにした、という。三十一番をとばして三十二番法性寺は岩船山を背にする山寺で、懸崖造りの観音堂へ参拝するのに山道を一苦労であった。

当日の参加者 十四名(ほかに非会員二名)

- 伊藤一美 上原菊枝 大河勝正 入谷加代子
- 鎌田茂男 島崎幸夫 鈴木順三 荻原由美枝
- 中平和成 藤原 徹 三井俊一 柿島香也子
- 寺田千香子 船渡しげ子

〇七月例会 七月二十日(土) 生涯学習センター

講演「和歌から見る紫式部の生涯」伊藤一美氏
紫式部は式部丞、越前守をつとめた藤原為時の娘、父方、母方共学問、文学の素養ある家系。父為時の越前行き同行したのち藤原宣孝と結婚し一女を得る。夫の死後一条天皇の中宮彰子藤原道長の娘のもとに出仕し、源氏物語を書く。和歌にも優れ「紫式部集」がある。この「紫式部集」からいくつかの和歌について伊藤一美氏の解説、感想を興味深く聞いた。中で下世話だが興味のある藤原道長と紫式部との関係、二人は「デキていない」ということのようにですね。

11月例会

▲国史跡長柄。桜山古墳をめぐる

日時：11月14日(木) 13時30分

集合場所：京浜急行返子線返子葉山駅
進行方向改札口前(終点です)

コース：蘆花記念公園→第一号古墳→第二号古墳→六代御前墓→京急返子葉山駅
→JR 返子駅(16時ごろ)

案内：伊藤一美氏(会員・鎌倉考古学研究所理事)

参加費：500円

神奈川県内最大の4世紀後葉の「前方後円墳」二基の見学です。山道を歩きますので靴にご留意下さい。

⑩ 下野谷遺跡(国指定史跡)

旧石器時代から縄文(早期・中期中葉・後葉)・近世・近代の遺跡。このうち、縄文時代中期(約四千~五千年前)のものとしては、南関東最大級の環状集落(墓域と考えられる土坑のある広場を、堅穴住居跡や掘立柱建物が囲むように並ぶ構造の集落)で、西集落は直径約150m、東集落は東西約300m×南北約180m。東西両集落計では、住居跡400軒以上、掘立柱建物跡20基以上、土坑千基以上)跡が確認されている。遺跡の標高は51~59メートル。石神井川流域の拠点として約千年に亘り存続していた集落で、さまざまな地域との交流の痕跡もあり、遺跡内からは伊豆七島神津島、信州和田峠産などの黒曜石のほか、ムラの長などの力や存在感を示す威信財とも考えられる耳飾りや垂れ飾り(ペンダントなど)、祭祀に使われたと考えられる石棒等特殊な遺物も出土している。

⑪ 幻の城址その② 東伏見稲荷神社

一九二九(昭和四)年に京都伏見稲荷神社の分霊を勧請して創建されており、「東伏見」の地名(一九六六年昭和三一年制定、西武新宿線東伏見駅(それ以前の駅名は「上保谷駅」)名の由来ともなっている神社。戦前、境内付近には中島飛行機の社員研修所があり、そのため米軍の空襲により中島飛行機武蔵製作所で亡くなった人々の慰霊碑も建立されている。神社「帯は、「新東京百景」の一つにも選ばれている地域。なお、社地付近には「保谷館」と呼ばれる城址があったとの伝承が残されているが、遺構は存在せず詳細は不明である。石神井川に臨む台地上に位置していることから、「豊島氏関連の城があったのではないか」とする説もある。

⑫ 下柳沢遺跡(幻の城址その③)

早稲田大学グラウンド跡地から発見された古墳期(中世を中心とした複合遺跡。遺跡内からは、約50基の地下式墳(墓?)と約30基の井戸跡が見付かったほか、鎌倉時代後期の大日如来を梵字で記した板碑、南北朝期の板碑3基、常滑焼の陶器、茶臼、天目茶碗、漆碗、兜の八幡座(頂部)なども出土しており、中世に館等が存在した可能性が高い。

豊島刑部少輔信満の刃傷事件とその背景(七) 伊藤一美

4 横目付豊嶋信満の役割と大名家

豊嶋信満屋敷の道具改めで明らかだが、信満のもとにかなりの品々が短い期間で蓄積されていたという事は、先述のように横目付としての職務とも絡まっていたことと受けとめられるのである。だが、「目付」と「贈答」という行為のみにこだわっているのは真の要因は見えてこない。それは「旗本」の役割を考へることから緋ける。山本博文氏によれば、江戸初期の慶長・元和から寛永期にかけて、大名と旗本とのつながりが顕著になると指摘されている(幕藩制初期の政治機構について『日本歴史』四七四号、一九八八)。すなわち幕府年寄衆と地方大名との「取次」として、有力旗本の手腕が発揮されるような時代になってきたのである。

こうした関係を豊嶋信満との間に取り持とうとした大名家が先述してきた黒田家であったのである。信満は黒田家のために年寄井上正就家との婚姻関係をはじめ様々なとりなしを行ったと考えられる。信満屋敷内にあった多数の金銀・刀・脇差類は、こうした関係の延長線上にあった、とみて

いとみられている。石神井川沿いに位置していることなどから、豊島氏との関連を考へる史家も多い。

⑬ 東伏見アイスアリーナ

一九八四(昭和五九)年に開業した西武グループのレジャー施設。主にアイスホッケーの関東大学リーグや東京都リーグなどの試合、フィギュアスケートの大会などで使用されている。また、年間を通して一般開放もされている。(了)

よい。信満は、黒田家と有力幕閣井上氏との橋渡し役として、その行動をとっていたのである。これが実現できなかったこと、その要因を造ったのが井上氏の言動であったとみたことが、おそらくは刃傷事件の直接の背景ではなかったか。

伊達氏の場合、信満が横目付として最初には任官した時期、すなわちその職務開始時期の元和四(一六一八)年、政宗は「ここ元ほど近くの義候間、御用等御隔心なく承るにおいては、大慶たるべく候」(元和四年)九月九日付け豊嶋主膳信満宛て伊達政宗書状案(仙台市史資料編12)「伊達政宗文書3・二〇〇四号」引証記(27)と記し、大名自身の進むべき意向とその行為について、幕府年寄衆の思わくや考え方などとの調整・仲介を信満に申し入れていることが知られる。政宗は、この時二人制で同時に「横目付」となった永田勝左衛門(永田重真・寛永三年九月將軍家光上落の時、豊嶋信満らと同行列奉行の一人(実紀)2・三七九P。のち同七年七月十七日、使番から大坂目付に向、同?四九〇Pほか)にも同様に返事をしたため、「御

- 当日の参加者 十八名
- 生田澄江 上原菊枝 沖 武人 入谷加代子
 - 大河勝正 鎌田茂男 栗原菊枝 荻原由美枝
 - 島崎幸夫 鈴木順三 中平和成 寺田千香子
 - 藤原 徹 三井俊一 本橋久世 船渡しげ子
 - 中島正比古 伊藤一美

以上の流れを考えると、幕府政治初期の幕府年寄衆と大名の政治的関係を仲介・調整するというような、旗本との「調整機能」がうまく機能・作動しなかったことが井上正就刃傷事件を引き起こしたというべきものではないか。その意味ではつとめて「政治的な事件」であって、『徳川実紀』2・四四一P「藩翰譜」が言うような「旗本の輩、遺恨を晴らさんには、殿中こそよき勝負の仕所なれ、遺恨をそのままにすてざるも武士道の一なり」というものではないと考えられる。

幕府は、そのうち旗本と大名との、こうした取次としての結びつきを徐々に制約し始めていく。山本氏は、年寄衆の談合・会議体制を幕府制度に位置づけつつ、將軍権力を集中化させていくこと、そして旗本が將軍家の藩屏となるように改めて編成しなおしていくことが課題であるとその方向性を押さえられている(前掲山本文)。(次号に続く)

◎ 寄贈図書

- 杉並郷土史会会報(三〇六号)..... 同会
- 北区史を考へる会会報(一五二号)..... 同会
- 板橋史談(三二二号)..... 同会
- 十条村研究(二〇二四年夏季)..... 榎本龍治氏